神戸大学交響楽団
松山演奏会

Program

ごあいさつ

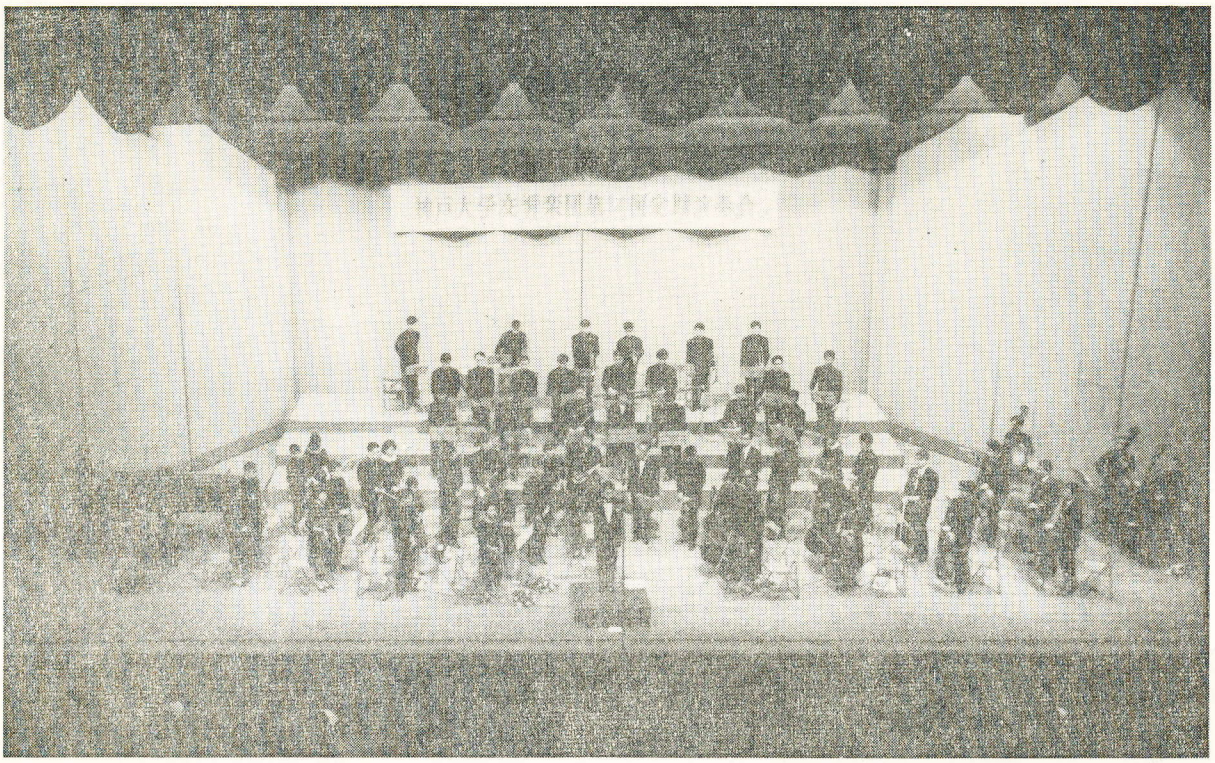
松山市民の皆様、本日は多数御来場下さいましてありがとうございます。

私達神戸大学交響楽団は、毎年夏休みを利用して、全国各地で演奏会を催しておりますが、今年は海を渡り、初めてこの松山市にやってまいりました。当地でこうして演奏会が実現できますのも、松山市民の皆様始め、凌霜会、KTC の方々の御尽力の賜と深く感謝致しております。

私達は、技術的にはまだまだ未熟な者ばかりでございますが、今夕は一生けんめい演奏致します。夏の蒸暑さを吹き飛ばす、若々しい演奏をお聴き下さい。そしてお気付の点はきびしく御批判下さるようお願い申し上げます。

大正4年に産ぶ声をあげた神戸大学交響楽団は、今年で50才を数えます。この記念すべき年を迎え、私達部員一同は、より一層の努力と精進を続ける決心を新たにしております。今後とも宜しく御支援下さるようお願い申し上げます。

1965年8月7日　　神戸大学交響楽団



プロフィール

▶ 原田美加

原田さんは、6才の時から古武弦野先生に手ほどきを受け、バイオリンになじまれました。バイオリンと共に育った原田さんは、神戸女学院大学で4年間、音楽の勉強と教養を養われ、この三月、立派な成績で卒業なさまいした。現在、音楽活動に、花嫁修業にと、日々忙しく活躍しておられます。

六甲山、その山ふところの芦屋に育った原田さんは、身心ともに伸びやかで明朗な方です。彼女の居あわすところには、楽しい雰囲気が満ちています。

彼女と会って語った人は、誰もが朗らかな笑いにひき込まれ、彼女に魅せられるでしよう。彼女の演奏には、彼女のすっきりとさわやかな人柄があらわれていると思います。御期待ください。　(M・N)

▶ 大軒　護

指揮者の手が振られると一斉に音が鳴り出す。指揮者は魔術師かも知れない。

彼は高校でフレンチホルン、大学一年末からバイオリンを習い始めた。今はセカンドバイオリンでも活躍している。指揮者の条件としては、音感の確かさ。少なくとも一つの楽器に精通すること。抱容力のあること等々が挙げられるが、学生オーケストラの間でこの条件を満たす指揮者が出ることはむずかしい。いつも指揮される側に協力がなければならない。彼は三年に指揮者となり、変化の多いメンバーを率い、多彩な音楽を指揮してきた。その柔和な顔つきと鋭いタクトさばきで我々を時には厳しく、時にはさとす如く彼は指揮している。現在、法学部の四年生、来春は卒業だが、社会に出ても、その指導性を発揮する事を皆は期待している。彼はきっとやるだろう。　(H・K)

▶ 植田吉波

理学部三年生。これ迄ファゴットを吹いてきた彼は今春から副指揮者として指揮棒を握るようになった。ベートーベンの研究では、我オケで右に出る者はなく、昨年春の合宿では部員を前に、とうとう40分余り、ベートーベンについて語り続けたという経歴の持主である。また、重いティムパニーも何のそのと、楽器係りをも兼任して我々の世話をしてくれる不言実行型の人間。

五月の大学祭で「ロザムンデ序曲」を指揮して以来、今日で三度目の指揮で、指揮者としての勉強は、まだこれからというところ。

今後は四年生の大軒さんを助けると共に大軒さんの後任として、ぐんぐん我々をリードしていってくれるだろう。

今夕は、彼の得意とするベートーベンの「エグモント序曲」をどのように指揮するかおきゝ下さい。　(K・N)

▶ 泉庄右衛門

泉氏は大阪の天王寺商業高校、京都音楽短期大学を御卒業後、大阪フィルハーモニーに入られました。そこで朝比奈隆、外山雄三氏などに師事され、現在同フィルハーモニーのクラリネット奏者として活躍しておられます。そして、この間、母校天王寺商高のブラスバンドを全国優勝させたエピソードも、持っておられます。その御名前から、どのようにいかめしい方かと想像されることかもしれませんが、実は我々とは年も違わない程お若い人です。そして親しみ易く、庶民的で、おそろしくタフです。それに、いつもはお忙しい中で我々学生とも気軽に話合って下さるし、時に合宿にも同行して下さいます。しかし、その様に我々にとり、得難い氏なのですが、我々は氏に全面的に頼ることをせず、あくまで学生中心のオーケストラとして氏には部分的な御指導を願っています。

今回はベートーベンの第一交響曲を御指導下さいましたが、その見事な指揮ぶりは今夕お集り下さった皆様方を魅了することでしょう。

— 神戸大学交響楽団 —

◇ プログラム ◇

ごあいさつ　　神戸大学交響楽団顧問経済学部教授　家本秀太郎

Ⅰ　エグモント序曲　　ベートーベン

Ⅱ　交響曲　第1番　ハ長調　作品21　　ベートーベン

Adagio molto—Allegro con brio

Andante cantabile con molt

Menuetto Allegro molt e vivace

Adagio—Allegro molt e vivace

○エグモント序曲

文豪ゲーテの有名な悲劇「エグモント」に、劇音楽十曲をベートーベンが作曲したのは1810年であり、それ迄、同時代の人でありながらお互いに交際の少なかった二人の天才が、この曲により芸術的に結びついたのである。特にこの序曲は、古今東西の序曲中で最高の芸術作品であると云われている。

曲は、まず悲劇的な序奏に始まり、次にアレグロの主部、そして「勝利の交響曲」（劇の最後にも演奏される。）が高らかに演奏され序曲は終る。

○交響曲　第一番ハ長調　作品21

この最初の交響曲を完成した時、ベートーベンは30才になっていた。まさに大器晩成と云わざるを得ない。従って彼の師ハイドンの面影が、この曲の至る所に満ちあふれていようとも、後の偉大な交響曲群を眺めた場合、その飛躍は実に驚歎に価するものと云える。それも、この曲の貴い過程があって、はじめて成し得た創造である。

第一楽章は、冒頭に不協和音をもつ序奏に始まり、快活な主部に移る。続く第二楽章では、典雅優美な旋律が展開される。第三楽章は活気のあるメヌエットとトリオ、そして、短い導入をもつ明快な第四楽章で曲は終る。

―― 休　　憩 ――

Ⅲ　バイオリン協奏曲　第3番　ロ短調　作品61　　**サンサーンス**

Allegro non troppo

Andantino guasi allegretto

Molt moderato e maestoso

Ⅳ　交響詩　フインランディア　　**シベリウス**

○バイオリン協奏曲　第3番ロ短調　作品61

サンサーンスの古典的傾向の頂点に達した時の作品。雄大な第三交響曲の書かれる少し前の1880年に完成され、バイオリンの鬼才サラサーテに捧げられた。翌年そのサラサーテの手によって初演されたこの曲は、全曲にわたり、広大な楽想をもち、バイオリンと管弦楽は密接な関係を保っている。

第一楽章は活々とした主題に始まり、甘美にして精彩な曲想が展開され、船唄のような第二楽章に入る。続く第三楽章は荘厳で情熱的な序奏部をもち、白熱する主題の展開、厳しゅくな旋律がバイオリンと取り交わされる。

○フィンランディア

シベリウスの音楽は北欧フインランドの美しい環境から生まれた美しい詩篇である。この国民音楽の典型作とも云うべき「フインランディア」は、シベリスの独創になるフインランド調の音楽詩で、フインランド政府は、この曲を国民讃歌に推挙し、音楽的愛国者シベリウスの名を不朽のものとした。

曲は先ず金管楽器の力強い合奏に始まり、続いて情趣漂う楽想が湧き出る。